前置詞から見た英文の構造

―― 事象に着目した分析 ――

河　本　　誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(1997年10月6日　受理)

序

前置詞句が名詞を修飾したり，動詞句全体を副詞的に修飾するような場合には，その中の前置詞の意味がきちんと説明され，認識されてきている。しかし，それが目的語に対する補語の位置に来ると，その意味が理解し難くなり，動詞を含めた文全体の意味や，前置詞句と動詞との共起関係（公式的捉え方）だけに注意が注がれがちになる。この原因は，日本語の文理解の仕方を英文の理解に持ち込むためである。従って，こういった場合の英文の組み立て論理（仕組み）を探ることが重要な課題として残っている。本小論では，日本語との比較を通して，前置詞句から見た英文の仕組みを探ることを目的としている。結論としては，前置詞句の中の前置詞を，その基本の意味で理解することが可能であり，また，そのことが英文の論理的な理解の基本になるということ。それは，英語の前置詞句は，目的格補語の位置にあるとき，目的格補語という文法的役割を担うと同時に，前置詞が持っている意味的役割をいわば二重に担うことがその原因で，そのことが日本語との比較から明らかになった。

1．問題提起

筆者が，英語を勉強してきている中で，様々なところで合点がいかない所があった。次のようなものは長い間違和感を持ちながらも，ほとんど分析されているのを見たこともなく，ただ覚えるしかなかった，

(1-1) A highwayman robbed the traveler of his money. (SRH)

追いはぎが旅人から金を奪った。

英文と日本文とを対比したとき，“the traveler” と “of my money” の部分に対応する日本語訳の部分は「旅人から」と「金を」になり，“of” がちょうど「を」に対応しているように見え，なぜ “of” が使われるのか，その場合の “of” の意味は何か，ということが当然疑問として持ち上がる。ときに “of” が「～から」という意味であるなどと言われてみても（辞書にはそのように分類してある），日本語で「お金から彼を奪った」では全く常識外の意味という感じしか持てない。

大津でも同様の疑問が取り上げられ，それに対して次のように考えている，

(1-2) They robbed me of my purse.

They stripped me of my shirt. (17)

「この場合のofは，文法書などでは『分離』の前置詞『～から』であるとされているが，そうだとすると，意味は『彼らはぼくの財布〔シャツ〕からぼくを奪った〔剝ぎ取った〕』となって，意味をなさないことになる」とし，*American Heritage Dictionary* の次の解説から，結局“of”は同格の前置詞であると結論付けている，

rob me = take property from me illegally

そして，次の用法の“of”とははっきりと異なるものであると考える，

The new medicine will cure him of his chronic kidney disease.

この場合，“rob”の文の“of”とは異なり，「彼の慢性の腎臓病〔財政上の心配〕から彼を直す〔解放する〕となって，ofは明らかに『分離』の of だからである」としている。この論法の問題点は，英語の動詞“rob”，“cure”に対応する日本語訳の動詞が異なった構造を要求することを基本に据えていることである。うまく日本語の文になるかどうかという点を英文構造の判断基準にしていることが決定的に問題である。それくらい，日本人はこの構文に悩まされてきているという証拠でもある。

次のような池上（1981）の指摘する文も日本人にとって驚かされるものである，

(1-3) Mary sang the baby to sleep. (277)

歌を聞かせて赤坊を眠らせた。

この文も日本語訳を見ると分かるように，日本人にとって元の英語が理解しにくいという感じを持つ。しかし，次の使役と言われる文については，ほとんど違和感は抱かないのではなかろうか，

(1-4) I made him go there.

私は彼にそこへ行かせた。

それは，“made”，“go”にそれぞれ日本語の「させる」，「行く」が一応うまく対応するから，という日本語訳の問題が入り込んでいるためであろう。従って，その対応が狂うと少し不安になってくる，

(1-5) What made him respected? (SRH)

どういうわけで彼は人から尊敬されたのか。

もう1つ“rob”と同じくらい筆者が理解し難かったのが次のような文である，

(1-6) Sheep provided us with wool. (SRH)

羊は羊毛を供給する。

この“with”をどのように理解すればよいのかということである。

上で挙げたような英文の前置詞に着目してみると，我々は事前にそれぞれの基本の意味を十分に理解してはいる。しかしながら，そのような前置詞が文の中に現れ，しかもそれ

が日本語とうまく対応しないときには単に全体を“構文”として片付けることによって，分析的，論理的かつ合理的な理解，解釈を放棄してしまっている。もし，それぞれの前置詞の基本の意味で上記の文がすっきり理解できるのであれば，日本人にとって極めて大きな意味があると言えるのではないか。

文全体の機能的な面は盛んに強調され，個々の単語よりもそれらにより大きな重点を置くことが力説されているという感じを筆者は持っている。日本人が英語が使えるようにならないのは，個々の単語に拘り過ぎているからだとも言われる。筆者にはそうは思われない。説明し難いところは全体的意味だけを説明して済まし，問題を避けているとしか思われないのである。

2．英文の OC， OA

1章での問題提起に対し，まず最初に注目しなければならないのが，従来から SVOC 構造として分類されてきている次のような文である，

(2-1) He made them go there.

この形のときには，誰もが知っているように“them”と“go there”とが OC になり，それらの間に主語，述語の文関係が成立するということである。“He”と“go there”とが主述の関係を形成するのではないことがポイントである。1章で見た例では，どれもが目的語とその後の部分とで主述の関係が形成していることが分かる。

ここで，SVOC の文と SVO の文との違いについて確認しておく必要がある。次の文は実は SVO と分類されて来たものである，

(2-2) A highwayman robbed the traveler of his money. (SRH)

(2-1) と (2-2) の違いは何かといえば，動詞の意味が変わらずに，目的語だけが動詞の後に来ることができるかどうか，という点である，

(2-3) He made them.

(2-4) A highwayman robbed the traveler.

(2-4) では (2-2) と“rob”の意味は同じであるが，(2-3) では，“made”の意味が(2-1)と同じと考えることができない，というのが区別の根拠である。

このことに関して，最近ではそのような分類が必ずしも合理的なものではないという考え方が出てきた。(2-4)については，SVOA に分類しようとするものである(Quirkなど)。いずれにしても重要なことは，文の理解ということに関しては全く同じ構造になっているということである。SVOA も SVOC も動詞の分類ということからは意味があると考えられるけれども，文の理解ということに関しては全く同じに扱えばよいのである。SVOC の文と同様に，SVOA の OA についても，主述の関係が成立するということが重要である。いわゆる目的格補語である。このことがもっと強調されるべきではないか，というのが筆者のまず第一の主張である。

以上の視点から1章で取り上げた英文を見ると，ようやく前置詞の意味，役割が理解できるようになってくる。目的語以降の部分が主語述語の文関係を形成しているかどうかを確認すればよい。

the traveler …of his money (1-1)

us …with wool. (1-6)

"of", "with" の基本の意味「～から」,「～と一緒に」でこれらがうまく理解できることが分かる。また，(1-3)の場合も，

the baby …to sleep

となり，前置詞 "to" の基本の意味で理解できる。これは SVOC や SVOA とやや異なる文型とも思われるが，それらが統一的に扱えることが重要であると考えられる。

〈"wipe" の例〉

SVOC, SVOA において，CやAの位置に前置詞句が来るとき，OC, OA の全体の意味が前置詞の基本（通常）の意味で理解でき，かつそうすべきであるということをはっきりと示す巻下の実例を次に挙げる，

(2-5) I wiped my hands with a towel. (28)

(2-6) I wiped my hands on a towel. (28)

(2-7) ...wiping the perspiration from my face... (38)

(2-8) ...attempted to wipe the soap out of his eyes. (59)

(2-9) He wiped his hand across his forehead. (102)

(2-10) ...she was wiping at her throat with a towel. (103)

(2-11) to wipe a cloth back and forth over the table. (185)

このような多様な "wipe" の実例を目にするとき，それぞれの文でOとAとの間の関係を見ると，前置詞が位置，運動に関して，その基本の意味で主述の関係を決定していることがはっきりと分かってくる。

〈OC, OAの叙述性〉

OC, OA 部分の認識について注意しておくことがある。この部分に主述の関係(nexus)があるということを強調してきているわけであるが，忘れてならないのは，この部分が全体として一つの品詞を形成するものではない，ということである。それらが1つの品詞として機能することがないということである。言い換えれば，その部分は擬似的ではあるが，節あるいは文の形の叙述になっているのである。特に OA 部分については，その認識が日本人に極めて不足していることが問題であると筆者は感じている。それは日本語の特徴と関係することで，Aが（日本語におけるような）動詞を修飾する単なる項というものではないことを認識することが重要であるが，そのことは次節で述べることにする。

3．対応する日本文

英語においては，OC あるいは OA の部分は，動詞が直接介入しないでも主述の関係が成立することが注目される。このことは，日本語と比較してみるとはっきりしてくる。次は OC や OA と分類されないかも知れないが，同じことである。

(1-3) Mary sang the baby to sleep.（池上277）

歌を聞かせて赤坊を眠らせた。

日本語の方は，“a baby”と“to sleep”の部分にどうしても動詞を補わなければ日本語にならない。このことから分かるように，日本語は動詞を中心にして考えると，それに助詞を介して複数の項が関係している。言い換えれば，動詞がそれに関係するすべての項を助詞で区別しながら一挙にまとめあげているのである。その際，動詞を無視した場合，各項の間だけでは相互に主述の関係などが決して成立しないのである。それが生じるのは，文末の動詞によるのである。従って，日本語は動詞を中心とした塊が単位となって文が形成されると言える。もちろん，名詞句の中では次のように主述の構造が動詞なしで成立することは当然である，

「彼の遅刻」，「火事による損害」

ここで言っているのは，動詞の項どうしでは，動詞がなければ項間で主述の関係が成立することはないということである。それが英語の［OC］や［OA］では，その前の動詞が何であろうと，位置的なものからその部分に同じ主述の関係が成立するのである。

各動詞について，それに対する項というものが，英語においては“階層的”，“立体的”に構成されうるのに対し，日本語では“平面的”でしかなく，鵜飼のようなものである。

日本語の助詞「に」について見ると，日本語の文が平面的ということがよくわかる。例えば，

(3-2) 私は彼にそれをもらった（頂いた）。

(3-3) 私は彼にそれをあげた（やった）。

これらに共通する「に」の意味ということになると，場所の指定ということであろう。詳しく見ると，「起点」，「着点」の両方に使われていることが分かる。その解釈としては，「もらう」では，「何を」，「誰から」というところが代表的だから，「誰から」の部分を「誰に」という，単純な助詞にまかせていると考えられる。意味的に考えれば，「私は彼からそれをもらった」の方が良いであろう。「てにをは」というのは，すべてそのように動詞に対する項の“意味的”関係を規定するものではないと言うことができる（「は」についてもおなじである）。このような助詞は各動詞に対する項の相対的共起性，つまり“文法”的関係を示しているとも言える。動詞への項の意味対応を一意的という点で犠牲にしてまでも，動詞を中心とした表現形式自体を単純化していると見ることができる。ほとんど「てにをは」という助詞だけで動詞の項が指定されるという簡潔さの代償として，各動詞に対する項指定が固定化してしまうという弊害が生まれる。これは，各動詞を使う場合の表現の仕方に

変化（variation）が少ないということを意味している。

〈文法関係 vs. 意味関係〉

別の言い方をすれば，日本語では，助詞が数個用意されているだけで，各動詞が表す概念に応じてそのうちのいくつかが使用される。そのうち，英語のSV，SVO，SVOOなどの構造に相当するものは「てにをは」である。日本語では，英語の位置で表される文法構造に対応するものがこれら助詞で表され，英語とうまく対応している。これらの日本語の文法関係を示す助詞「てにをは」と，さらに意味関係を表す他の助詞とは，一つの動詞の項に，当然，重複しては使えない。しかるに，英語では，日本語の文法関係を示す助詞に相当するものが位置関係で示され，さらに，文法関係を担う位置に，前置詞句が来ることによって，動詞と項の間でやや複雑な“意味関係”を表すことができるようになっていることが分かる。これまで見てきた日本語訳が元の英文に対応しにくい場合というのは，英語の前置詞句の文法関係とその中の前置詞による意味関係との二重の役割が，日本語での単機能の助詞だけではうまく対応しきれない場合とまとめることができそうである。日本語にも「～のなかに」，「～から」のように，意味的助詞が存在する。しかし，助詞部分が意味的役割と文法的役割とを二重に帯びることはない点が英語と根本的に異なる。逆に英語のVO部分が比較的日本語に対応しやすいのはその同じ理由からであろう。そのため，英文のSVOC（SVOA）などに対応する日本語訳としては，次のようないくつか選択肢が存在することになる，

(1) OC間に動詞を補い，複文にする

(2) 複合動詞化する（例：「押す」→「押し出す」）

(3) 「させる」などを動詞に補う

日本語との対応で言えば，日本人はSVOCやSVOAの型の英文に接するとき，以上述べたような言語の違いから，特にOA部分に主述の関係を十分に意識せず，元の英語を日本語に置き換えて日本語式に理解しようとする傾向にある。OとC（A）との結合を構造のない単なる項の集まりとして捉えがちになるということである。そして，あくまで，日本語の構造に持ち込む（直す）ことによって意味を取ろうとする。ここは教育の領域の極めて大きな問題であると筆者は考える。その結果，標準的な日本語訳に対応させるあまり，必要以上にOA部分を複雑なものと捉えたり，又，OA部分などの主述関係を認識しないままで済ますことになる，

(3-4) You had better put the knife out of the baby's reach.（複雑な場合）
そのナイフは赤ん坊の手の届かない所に置いたようがいいよ。(SHR)

(3-5) Sheep provided us with wool.（認識なしの場合）
羊は羊毛を供給する。(KED)

筆者としては，この点での日英語の言語としての違いを一般論として早くから理解させた上で，英語をそのままの形で，即ち，CやA部分が前置詞句であれば，その中の前置詞を

その基本の意味で理解できるように，即ち英語の論理に則した一貫した文理解のやり方を初級の段階から訓練することを提唱するものである。

4．事　　象

主動詞Vによって全体事象が捉えられ，その中の動作主が通常主語に据えられる。その後に来るものとしては，原則的にはその事象の中で動作主の次に取り上げたいものになる。被動作主が存在し，それに付加して用が足りれば目的語のO 1つということになり，又，動作の向かう場所を示すことが必要があれば前置詞句や副詞などがVの後に続くことも可能である。そのような見方をすることによって初めて次のような文もすっきりと理解できるようになるのではないかと筆者は考える，

(4-1) shoot him

(4-2) shoot at him

この場合，shoot が自動詞か，他動詞かという区別など問題ではなくなってくる。「後者(4-2)の場合，動詞“shoot”と“him”との間に“at”が入り，前者と比べて“shoot”の“him”への関わりが直接性に欠けるようになる」というような説明を読んだ覚えがあるが，むしろ，事象を描写するという中で取り上げたい部分，即ち焦点の置き方の相違と考えれば，何ら問題は生じない。後者の場合は，“at”を含めた“at him”に焦点が置かれたものである。従って“shoot”という動詞の表わす意味は全く同じであり，動詞の表す動作や行為の遂行，未遂行の違いなどは焦点の置き方から来るプラグマティックスの問題に過ぎないということになる。このように，表現したい対象を事象として捉え，その一部分が（焦点化を伴って）言語表現として取り上げられると考えることにより，後の議論で分かるように，文の構造というものが良く見えてくることになる。

〈全体事象 vs. 補足事象〉

Vで表そうとする事象が全体事象ということであれば，それに続く OC，OA 部分の表す事象はそれに関連する事象ということになる。それを全体事象に対し，補足事象と呼ぶことにする。すると，SVOC や SVOA では，事象的に見て二重構造的に記述されていることになる。これを SVO の文と比較してみると，SVO の文ではVの記述を補う部分が単なるOということになる。これで用が足せればそれでよいし，そうでなければ，補足事象まで必要とすることになり，SVO から外れることになる。日本語では，これまで述べているように，動詞を固定して考えれば，それが表す事象は1つだけという構造である。二重構造的にしようと思えば，動詞などを付加しなければならない。

動詞Vの後に続く OC，OA 部分は，Vの表す事象に関連した事象を表す。その事象がVの表す全体事象から比較的距離が小さい場合である。それが大きくなってくると，副詞節などの形で続くことになる。

(4-3) He required her to explain it.

(4-4) He required that she (should) explain it.

(4-5) He required it so that everybody would be satisfied.

例えば，fax についてみよう。元々は facsimile から来ている。1984年発行の辞書 KED では，名詞の訳を与えているだけである。その後，だんだんと fax の機械が普及してくると，それが行う仕事，即ち「fax で文書を送る」ということを動詞として表すようになる。さらには，SVOA の型も可能であり，A の部分を送り先，経由箇所など移動や方向の記述を付加することが可能になってくると予想される。それは，本来，fax の表す動作自体に運動要素が入っていることと，上に述べた英語の構造から容易に行うことができるのである。その後，例えば，fax で無関係，無関心な内容が大量に送られてくるという被害が大きく広まってくるとすると，その部分も fax の文で表現できる可能性もある，

(4-6) ? They faxed me out of sane.

(4-7) ? They faxed me into scare.

“out of sane” や，“into sacre” の部分が，“fax” の表す “典型的”，“標準的” な事象から遠ざかるにつれ，節の形にする方が無難になってくる，

(4-8) We fax each other so taht the time for meeting together will be saved.

従って，動詞Vの後へは，動詞Vへの関わりの大小で異なった形が続くことになる。そのように見ると，SVOC や SVOA の OC や OA 部分は，位置や運動に関することを中心にかなり幅広い内容までを，簡潔に表現しうる形になっていると評価することができる。日本語と比較して，この点での英語の凝縮性の高さは認めざるを得ない。

〈目的語の役割〉

ここで，目的語の役割を確認しておくことが必要である。従来から言われているように，目的語は典型的には動詞の表す動作などを受けるものとしての被動作主を焦点化して取り上げるものである。その後に，その目的語についての叙述がさらに続くことがあるのである（SVOC や SVOA など)。“find” という動詞でそのことを見てみよう。

(4-9) I found her.

(4-10) I found her to be very smart.

後者（4-10）の “found” の意味は，（4-9）の “found” の意味「(物を）見つける」とは異なり，「(～が～である）と分かる」という意味であると説明されているが，それは正しいことではある。ところが，実は “her to be very smart” を部分事象と考えれば，それと動詞Vとの関係を考えたとき，その部分事象全体を「見つけた」((4-9)の意味で) という形になっていることが分かる。だからといって，Jespersen (217) のように，OC 部分を目的語（Nexus Object）と取るべきだというのはどんなものだろうか。ここのところをきちんと理解するには，レベルの違いということがポイントになる。

Vから見ると，主に動作を受ける対象としてOが選択される。Sは通常，動作を行う動作主ということになる。OC や OA では，Oはその後へは主語として働くということであり，

CやAは目的語Oの述部になっていて，広い意味での目的格補語である。このようなOについての2つの役割は，Oに対して従来から行われてきた説明であり，それらは互いに矛盾するものでは決してない。SVOC と SVOA とで，前者ではCを除くと全体が全く意味をなさなくなるので，OC 事象の全体にVが直接的に関与しているわけであるが，Oそのものが V の動作の対象物（被動作主）ということでは，上の(4-9)，(4-10)で共通している点が重要である。即ち，目的語Oはその前後のVとCに対し，従来から認識されている2つの異なった役割を担っているけれども，それはレベルが異なっているということである。このことをまとめると次のようになる，

(a) 目的語Oは動詞Vの影響を受ける対象として焦点化して取り上げられたものである。

(b) OC, OA の所は部分事象を形成し，それは動詞Vによって表す全体事象の一部分や，それに関連する事象である。

この二重構造の認識がこれまで一般に十分ではなかったと考えられるが，この部分は，日本語と大いに異なっているために，それも当然だったかも知れない。

〈使 役 動 詞〉

使役動詞といわれるものは，事象を引き起こす，作り出すということで共通している。例えば“make”では，目的語は，あくまで被動作主だけであるが，使役構文の中でのOそのものは「作られる」わけではない。OC 部分が“make”の表す全体事象に対する関連事象で，それが動詞“make”の結果になっている，即ち“作られる”のである。

このように，OC を1つの事象として捉え，動詞 Vがそれに作用している，と事象という観点から見ることにより，いわゆる使役動詞というものがよく見えてくることは，既に河本で述べたことである。

(4-11) He made him go there.

(4-12) He had him go there.

OC で表される事象を前者（4-11）では“make”の基本の意味“作る”で，そして，後者では“had”の基本の意味の“持つ”で理解でき，両者の使役性の違いも，この基本の意味の違いからはっきりと，しかもすんなりと理解できることがわかる。

〈動詞の使用フレーム（型）〉

巻下が，様々な動詞があるにも関わらず，次のような動詞をとりまくフレーム（型）がある場合には，その中での動詞の意味が中性化されると記述している。

(4-13) The pencil pierced the cushion. (121)

(4-14) The pencil pierced through the cushion. (122)

(4-15) The pencil went through the cushion. (122)

(4-16) The pencil pierced its way through the cushion. (122)

(4-17) The pencil make its way through the cushion. (122)

素晴らしい観察であり敬意を表するものであるが，筆者としては，ここの所は次のように

考えたい。それは動詞はあくまでも事象全体を表すもので，その意味がフレームの中で変化しているわけでは決してない。それぞれの動詞による固有の全体的捉え方の後で，さらにその部分事象がどのように述べられるかの違いに過ぎない。部分事象（関連事象）の箇所が同一であるからと言って，動詞Vの意味が変化していると考える必要は全くない。ただ，日本語への訳では動詞Vに対応する日本語部分が中性化するということは間違ってはいないといえる。

〈自動詞 vs. 他動詞〉

そのように考えると，自動詞と他動詞の2つの用法を持つ動詞というのも，随分理解し易くなってくる。(典型的には)ある動作を他から区別して認識し，それを記述するものが動詞である。本来，動作を伴わないものや，被動作主が存在しない事象を表すものが，純粋な自動詞ということになる。それに対し，他動性を有する動詞の場合が問題である。被動作主的なものを取り上げないで済むときには，自動詞的な用法（表現形態）になってくる。後ろに名詞を付ければ，その目的語である被動作主部分にも焦点が置かれることになる。省略による他動詞の自動詞的用法では，動詞の表す意味自体はその他動詞用法と全く同じであるが，必要としない部分を表現しないだけのことである(省略表現)。日本語では，自動詞を他動詞として使用するときには，目的語を「を」又は「に」で示し，それと同時に「～させる」などを動詞に付加するなどの仕組みが作られていて，動詞の他動詞的使用が可能になっているが，その際，このように係り結び的になっていること自体が，英語との比較で見えてくる。英語では，単に動詞の後に名詞を持ってくることで，自動詞的なものでも他動詞的用法が可能になるのが特徴であるといえる（参照 3-1)。

〈起点 vs. 着点〉

動詞Vの表す事象に対し，その中の動作の起点，着点に関する事象が OC，OA の箇所に来る場合を見ると，それらの出現頻度として大きな差が存在するのではないかと筆者は予想している。明らかに，池上（1981）のいうように着点（順方向）が続く場合が多い気がする。今後，どのような部分事象が続くのか，その分類が筆者の課題である。1つの研究方針として，昔から使われている動詞について最近の文とかなり昔の文とでその点での使われ方の比較をすることと，新しく生まれた動詞の使われ方を見ることなどが考えれれる。

〈動詞の位置〉

日本語の助詞は代表的には次のようなものがある，

「て」，「に」，「を」，「は」，「が」，「から」，「と」，「へ」，「で」

各動詞に対し，それが表す事象の中の代表的な事項が，これらの助詞と共に項として取り上げられることになる。その際，例えば，「乗る」という動詞は，それ自身方向性までは含んでいない。それに方向性を付加しようと思えば，

「乗っていく」

というように，別に運動の動詞を付加しなければならない。こうするしかないというのが日本語の特徴である。英語では，動詞を付加する必要はなく，前置詞句などの付加だけで同じことが言える，

(4-18) They rode to Osaka.

このような日英語の違いは，やはり語順が大きく影響していると筆者は考える。日本語でも，

(4-19) 彼らは乗った(乗って行った)，大阪へ。

では，「彼らは大阪へ乗った(乗って行った)」より，違和感がずっと少ない。このことから，次のような予想が考えられる，

予測：ある事象が動詞により全体的に示された後では，それの付随事象の記述は容易になる。

このことは，特に SVOA のA部分に当てはまると考えられる。ただ，その際，利点としては，Aだけを付加した形の簡潔な表現でありながら表現内容を豊かにすることが可能になるということであるが，A部分がOに対するAなのか，それとも VO 部分を修飾する VO 型なのではないか，という紛らわしさが生じる可能性を伴っている。そのため，技術英語などでは， SVOA 型は避けられる傾向があるということもありうることではある。

5．統一的認識への課題

筆者は英語の熟語，成句を単に覚えさせることには反対である。特に日本語訳との対応だけで覚えることには反対である。もっと論理的な分析が可能であれば，それを利用すべきであると考える。例えば，“kick the bucket” と “catch up with” を同じように単に熟語として覚えようとすることには疑問がある。この2つは，難しさが全く異なっている。前者では，語の構成に関して何ら難しさはなく，この由来を一度でも聞けばそれで終わりというものである。単に婉曲・比喩の問題である。しかし，後者においては，語の構成に難しさがあり，“up” や “with” の部分までもがこれまで説明されているのを筆者は見たことがない。この場合，前置詞 “with” をその基本の意味で理解でき，副詞 “up” の意味もその基本の意味で論理的に理解できれば，この場合も苦労なく記憶，運用できるようになると確信する。この部分の解明が筆者のこれからの大きな課題の1つと考えている。

さて，これまでの所で，動詞の後に簡単な形（OC や OA）で主述関係が形成されるのが，英語の特徴であると述べてきたのであるが，残念ながらこれですべての文が統一的に理解できるというわけでない。それは次のような文があるからである。

(5-1) I envied her for her composure. (SRH)
彼女の落ちつきがうらやましかった。

(5-2) He envies her the position she has achieved in her profession. (SRH)
彼は彼女がその職業でかちえた地位をねたんでいる。

これらの文では，目的語の表す対象が，動詞Vによって，物理的動作を受けたり，変化させられたりするものではないということが，これまでの考察の文とは根本的に異なっている。同じように，動詞Vによって，目的語が表す対象に，非物理的な変化を生じさせる場合もある，

(5-3) This picture reminds me of my young days.

(5-4) I couldn't convince her of her mistake.

(5-5) Did you inform the post-office of the change of your address?

これらの文では，目的語とその後の部分とで，前置詞の基本の意味が生きた形の主述の関係を認めることには無理があるとしか考えられない。これらの文をどう見るべきか，現在のところ，筆者には，次に列挙するような可能性がある，という段階に過ぎない。考察の前提は，前置詞が絡んでいる場合，前置詞はあくまでその基本の意味で，合理的に理解できなければならないことである。

〈1．結果 vs. 始動：SVOA〉

もし，Vの後が結果を述べているものと考えると，前置詞としては，これまでの主張からいって，“of”よりもむしろ“with”になるべきものである。そうではないのだから，例えば(5-5)について，素直に OA は主述の関係と見るのである。そうであれば，OA 部分の「“the post-office”が“the change of your address”から離れている」ということをOに“inform”すると見るのである。従って，OA 部分は動詞“inform”が表す動作の結果ではなく，動作前の状況を示している，ということになる。

〈2．SVOO〉

辞書にはこれらの“of”は動詞の表す動作の目的を表す機能を持っていると説明されている(SRH)。それと同じように，池上((1991) 23)は興味あることを指摘している。それは，“of～”が名詞句構造の中では目的格を表すのに通常使われていて，それが動詞に繋がった形で使われているものであり，それは他の前置詞では普通のことである，というものである。“I heard of ～”も同じように考えられる。

“of 名詞”の形は，ラテン語の属格から来ている可能性があり，その属格というのは動詞に直接結び付くもので，現在の“of”の〈目的〉を表す用法に繋がっていると考えられる。そうであれば，ラテン語の属格の詳しい研究を行い，フランス語などとも比較を行う必要があろう（「OEでは享受・欲求・感謝・関心などの感情を示す動詞や形容詞に伴うことがあった」(新英語学事典483)ようである)。注意しなければならないのは，辞書に書いてある分類というのは，現在の英語をできるだけ合理的に理解しようとするものであり，“of”の“目的”用法というのも，現在の視点からの機能的な解釈（こじつけ）の可能性があるということである。筆者の感覚では，このようなことが生じるのは“of”に限られていて，他の前置詞の場合には，ほとんど起こらないと理解している。“envy”などの場合，他の動詞とは区別して考えることができるわけであるが，歴史的な見方が重要な鍵になりそうであ

る。

〈3．SVO〉

“remind”, “convince”, “inform” などは，SVO と考えるべきかも知れない。“of” を“～から”という意味で理解しようとすると，“of” 以下は副詞的なもので VO 全体を修飾していると見ればかなりすっきり理解できる。また，“part with”（池上(1981) 170）についても，この考えではうまく説明できる。“He struck me on the head” についても同様で，“on the head” 部分が VO を副詞的に修飾していると見るのである。このように考えると，動詞Vの後に［名詞］［前置詞句］が続いた場合，様々な修飾構造（文型）が生ずるということになる。考えてみれば，前置詞句のところには，形容詞や副詞が来ることもでき，それらはやはり様々な修飾構造（文型）を作り出しているわけで，それと同じと考えればいいのかも知れない。このことは後で述べる制約に繋がっていると考えられる。

〈4．SVOC〉

“remind (me of my school days)” について，OA 間には，単純に前置詞の基本の意味で主述の関係が成立していると見なすことはどうであろうか。意味から考えると，前に述べたようにそれでは理解しにくい。むしろ，逆の関係になる。しかし，これを補うのが動詞Vの働きと考えるのである。この場合，動詞の意味から OA の意味関係がマイナスになっていると見るのである。そうすれば，“She must part with jewels” の “with” の意味も同じように理解できる。この場合は“part yourself”と考えるのであるが，なぜ“from”を使わないのか（その表現は異なる用法として存在する），なぜ “of” ではないのか，という問題は残る。

〈制　　約〉

以上のように，本節までに述べた〔全体事象＋部分事象〕構造がうまく適用するのは，位置，運動の要素を含み，変化を伴うような場合である，という制限を加えなければならないようである。物理的な変化を伴う場合などが，本節までのところに最も良く当てはまりそうである。それに対し，心的なことを述べる場合には，位置，運動を伴う場合とは表現が異なる場合がある，ということのようである。本節で述べた例外的なものが本節までのものと区別されるのはその点である気がする。そうであれば，動詞を修飾する前置詞句の方は，上記〈3．SVO〉のように考え，日本語とうまく対応するから問題はなく，日本人にとってこれから理解を深める努力をしなければならないのは，動きを伴う事象の表現形式というように結論付けられるかも知れない。

〈統 一 化〉

筆者は当初，“rob” や “provide” の文での目的格補語の位置に来る前置詞をその基本の意味で理解できるようになり，それと目的語の二重性ということだけですべての英文が統一的に理解できるのではないかと考えた。即ち，主動詞に対しては目的語として被動作主の役割を，その後のものに対しては主述の関係の主語の役割を担っているということであ

る。その見方からいくと，SVOO の

(5-6) I'll get you something.

などの文では，SV [O HAVE O] となり，また，

(5-7) She called her Mary.

では，SV [O IS O] というように，一応，そこまでは統一的に見ることができることが分かった。しかし，この節で取り上げた"remind"，"convince"，"inform"などの場合には，二重構造では扱えないのではないかと現在感じている。この部分は筆者の今後の重要な課題である。

Works Cited

池上嘉彦：『「する」と「なる」の言語学』大修館書店．1981.
池上嘉彦：『〈英文法〉を考える』筑摩書房．1981.
大津栄一郎：『英語の感覚（下）』岩波書店．1993.
河本　誠："英文の〈様態＋事象切り出し〉構造分析" The Okayama Review of Language and Literature No.1, Okayama Study Group on Language and Literature 編 1995.
新英語学事典　研究社 1982.
巻下吉夫：『日本語から見た英語表現』 研究社 1984.
KED：『リーダーズ英和辞典』 研究社 1984.
Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar III Heidelberg* 1927.
SRH：『小学館ランダムハウス英和大事典』 小学館 1973.

English Sentence Structure Seen From of the Preposition

Makoto KOUMOTO
Department of Socio-Information,
Faculty of Informatics,
Okayama University of Science,
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005 Japan
(Received October 6, 1997)

In this paper, I try to capture what semantic function a preposition performs in the case of English prepositional phrases, through the comparison of English sentences with their Japanese counterparts.

Prepositional phrases in English are sometimes very hard to understand for the Japanese when they are in the object complement position. In such sentences, we often find that English and Japanese don't have consistent structural correspondences. The main conclusion concerning this matter is that prepositions are understood "correctly" only if clauses and phrases are looked at from the perspective of "event."

I found that if we try to understand a preposition within prepositional phrases with its basic meaning, we can see English sentences in their correct and direct way. Another finding is that Japanese does not use position as a grammatical tool as in English and yet the Japanese often try to understand English sentences from their Japanese translation.